

山の植物

滋賀県は太平洋側と日本海側の気候区が接し、北部は冬季の積雪の影響を強く受けた植物が生育し、南部では暖かい地方の植物が見られる。また、北から分布してきた北方系の植物もみられ、さらに、冷温帯と暖温帯の植生域の移行部にあたることから植物相は複雑となる。

1.はじめに

沖積低地周辺の丘陵地には、古くから人と自然とのかかわりの中で維持されてきた林が広がる。農耕物資や生活用具を調達した里山林で、もともあったヤブツバキ域の原植生であるシイやカシ類の森とともに、多くは、アカマツやコナラを主体とした二次林が広がる。標高が700mを越えたあたりから、ブナクラス域の植生へと変わり、ブナを主体とした落葉広葉樹林が見られる。また、湖西地域には、日本海側に特有なアシウスギが混生する、針広混交林が広がり、滋賀県南部にはヤブツバキ域からブナクラス域への移行帯に、モミを主体とした中間温帯林が見られる。

山地の植物は、これらの植生域に見られる植物で、気候的条件(気温、降水量、冬の積雪など)、地形・地質的条件(石灰岩地、花崗岩地、尾根、溪谷など)、人為的影響を反映しながら生育する。特に、人為的影響はきわめて大きく、県内のほとんどの地域で、原生的な植生はみられず代償植生となっている。

2.固有種(特産種)

地理的に限られた地域にのみ分布する生物種を固有種または特産種と呼ぶ。ルリトラノオ、イブキレイジンソウは伊吹山だけに分布する。タキミチャルメルソウやコイブキアザミは、伊吹山地から鈴鹿山地の限られた地域に生育し、カツラカワアザミは大津市葛川周辺にのみ生育する固有種である。

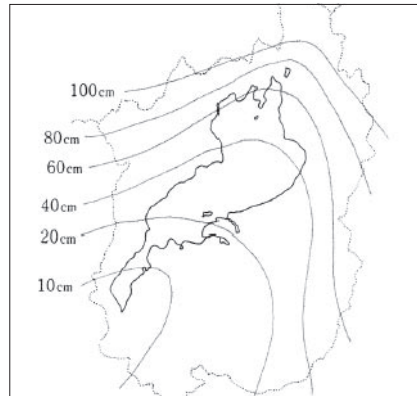


図2-15-1 最大積雪量(平均)の分布(武田, 1991)

3.日本海側の植物(多雪地の植物)

滋賀県北部は、冬の積雪が多く日本

【原植生】人間が手を加える前に成立していた植生。「今は、アカマツも林だが、原植生はシイの森である」などと使う。

海型気候区に属している(図2-15-1)。このため、圧雪や雪の保温効果の影響により、多雪地特有の植物が生育する。エゾユズリハ、ハイヌガヤなど太平洋側に対応する種をもつものや、タイムガサ、オオバキスミなどこの地域で分化した植物が生育する。

4.太平洋側の植物

滋賀県南部の降水量は夏に多く、冬の降雪は少なく、太平洋型気候区に属する。雪が多い地域に対応したイヌガヤ、カヤ、ナガバノスミレサシンとともに、ハガクレツリフネ、アオモジなどが生育する。

5.北方系の植物

加賀の白山から延びる山地は、滋賀県の北部で2つに別れ、一方は伊吹山地に、また、一方は高島市の赤坂山へと続く。寒冷期に、北から分布を広げたいわゆる北方系の植物は、南または西へと分布をひろげ、滋賀県まで達したものがあつた(図2-15-2)。キンコウカは滋賀県南部が南限となり、伊吹山に分布するハクサンフウロ、キンバイソウや、赤坂山に見られるカライトソウはこの地域で南限または西南限となっている。



図2-15-2 近畿地方の植物区系図(村田, 1968〔ふるさと滋賀の森林より転写〕)

6.レッドデータ種

滋賀県レッドデータブック2005年版には、620種の植物が掲載されている。これは滋賀県に自生する植物のおよそ1/4にあたり、年々その数は増えている。なかでも、クマガイソウ、キバナサバノオなど絶滅危惧種が101種と、全体の1/6近くにのぼる。その理由として、生育場所の環境変化や開発、また、人による採掘などの影響が指摘されている。

グリーンウォーカークラブ 青木 繁

関連する項目は 1-11 2-16 写真E(P4)

【代償植生】多様な人間の影響のもとに自然植生の代償として成立する植生